

『地方から日本の成長戦略を問う』

第6回「野生動物といかに付き合っていくか」

藤波 匠

株式会社日本総合研究所 調査部 上席主任研究員

ちょうどこの原稿を書こうとしているとき、京都大学付近にイノシシが出没し、大騒ぎとなったというニュースが報道されていた。イノシシが現れたのが、京都御所と平安神宮の中間のエリアで、比較的中心街に近いエリアだったこともあり、話題となったようだ。

全国では、野生の鳥獣による農作物などへの被害が依然として続いており、2015年度の被害額は176億円であった。それでも、ピークであった5年前に比べれば、被害額は26%ほど減っていることから、各地で取り組まれているハンターの育成などの効果が出ているのかもしれない。もっとも、被害額はあくまで届出ベースであり、実際にはこの何倍も損害が出ているとされており、決して甘く見るべきではない。報奨金を増やし、獣肉の販路を確保するなど、ハンターを生業として生活できるだけの環境を整えることで、鳥獣害対策と過疎対策の一举両得の政策が望まれる。

しかし、自治体の取り組みやハンターの活躍にもかかわらず、今後野生鳥獣の街なかへの出現は増えてくる可能性がある。近代化以降、都市や人の暮らしの場は拡大され続けてきた。さらに人が住んでいない山林でも、木材利用や山野草の収穫等、人の活動エリアは広大な面積に及んでいた。林道などを走るトラックや重機が発する音におびえ、野生生物は山の奥深くに押し込まれ、その数を減らしていった。

ところが近年は逆の現象が起こっている。山から人のにおいや音が消え、過疎が進む集落も人気がなく、鳥獣にしてみれば、恐れるものがなくなり、市街地までの間合いを詰めている。そして何より、野生鳥獣が人の暮らしに順応したことが大きい。車を恐れなくなり、人の発する音も日常的なものになっている。

先日、NHKで放映された「プラネットアース☆(ローマ数字2) 都市編」では、都市に順応する動物たちの様子が描かれていた。ハヤブサという猛禽類の個体密度が、世界で最も高いのは、ニューヨークであるという。一時はすっかり姿を消したハヤブサが、摩天楼を元来の暮らしの場である断崖絶壁に見立て、順応したらしい。ビルが発する上昇気流を活かし、ハトを狙うのだという。

街なかに大型のイノシシやシカが出てくることは、見慣れた光景になるかもしれない。奈良公園のシカは特殊な例としても、神戸の東灘区あたりの住宅街では、昔からイノシシが当たり前のよう闊歩している。人の側にも、そうした状況への心構えが必要となるだろう。

2017年6月19日

本レポートは、共同通信社および全国地方紙が運営する行財政専門情報サービス（47行政ジャーナル）に不定期で掲載しているものです。